

5. 早期療育教室のありかたについて

—保健師の役割—

鈴木 あゆ子、荻原 幹子（須坂市健康福祉部健康づくり課）

キーワード：早期療育、保健師の関わり、子育て支援、連携

要旨：長野県須坂市では幼児健診の発達検査の統一とともに、親子教室（療育教室）を開始した。親子教室の課題と今後のあり方を明確にするために、これまでに教室に参加した児の保護者に、参加したきっかけや参加中の思いなどについて調査を行なった。今回これらの結果をまとめるなかから、早期療育教室での保健師の役割として、保護者に子どもの発達をわかりやすく伝える技術、保護者への支援、児の成長に合わせて福祉や教育の分野と連携していくことの重要性が明確になった。

A. 調査の目的

親子教室は平成元年度から5年間にわたる、精神保健福祉センター幼児健診・療育モデル事業として始まった。その後20年にわたり、毎週水曜日発達に応じた2教室を継続実施している。参加者は、幼児健診¹において発達の遅れが疑われた児と親のほか、親が育児の困難さを抱えて参加する場合もある。幅広い参加者に対し、地域で実施している療育教室の課題と、対象になった親のニーズを明らかにすることで、保健師の関わりと、今後の教室のあり方を明確にすることを目的とする。

親子教室の対象年齢はおおむね2歳前後から4歳未満。

B. 調査方法

調査時期：平成23年9月

調査送付者（回答者）：親子教室参加児の家族

対象児：就学以上、19歳以下

（教室実施年度：平成7年度から20年度）

対象数：116名（児の性別＝男89人、女27人）

調査方法：郵送調査（無記名）

アンケートは参加した児の現在の年代、性別、記入者の児との関係、参加したきっかけ、児の行動等で困ったこと、教室に参加しての感想や家族支援、スタッフの関わり、親子教室終了後に希望するサービスなどについて、選択回答方式および記述式により行なった。

C. 結果

調査対象者のうち、41人（35.3%）から回答を得た。回答者の児との関係は全て母親だった。参加のきっかけは「幼児健診で誘われた」が27人で最も多く、次いで「健診後の個別の相談（心理相談）」が16人だった（複数回答あり 図1）。

『親子教室の参加にあたって、保健師からどのような説明があり、それを聞いてどう感じたか』に対する

回答では、「ショックだった」、「不安になった」のマイナス的なイメージが合わせて約3割（13人）であったのに対し、「ホッとした」、「安心した」が合わせて4割強（18人）と、プラスのイメージの方が多かった。（グラフ1）

また、保健師から説明を受けて、プラスのイメージを持った理由として、「子どもの発達の遅れを感じていた」、「心配なことがあった」といった内容があげられている。

『子どもの行動等で困ったこと』の設問では、39人（95.1%）が何らかの困った行動を感じていた。その内7割以上が「言葉がゆっくり」と回答し、次いで「動きが多い」が約4割の17人が回答した（複数回答あり）。感じ始めた時期は、「動きが多い」が1歳～1歳半、「こだわりが強い」、「言葉がゆっくり」では2歳～3歳が一番多かった。

親子教室に参加しての感想では、『教室で子育てについて何か言われるのではないかと不安があったか』の問いでは、「なかった」「あまりなかった」が26人（63.4%）で過半数をしめた（グラフ2）。また、親子教室において子どもの困った行動についてのアドバイスが、「なかった」「あまりなかった」と答えている人が34.1%、親子教室の内容を実際に家庭で役立てることについて「とても難しい」「難しい」と答えた人が39.0%いた。

『スタッフのアドバイスで役にたったり嬉しかったこと』（自由記述）では、「簡単な作業でも出来たときにほめてもらった」、「よくほめてもらった」、「出来ていることを具体的に話してもらった」、などが挙げられた。逆に『スタッフから言われた言葉で、つらい気持ちになったり、ストレスを感じたこと』では、「ダメと言われたこと」、「子どもの特性について教えてほしかった」、などの意見があげられた。

『今後お子さんの成長において必要と思うサービス』の設問（選択式）では「親が相談できる場所」、「療育

¹ 1歳、1歳半、2歳、3歳を対象とした健診の総称

教室、「発達検査」、「子が相談できる場所」の順に選ばれていた。

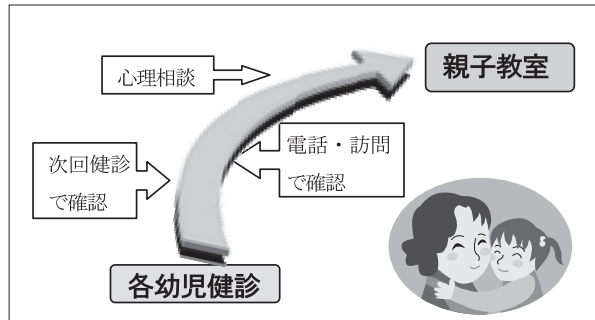
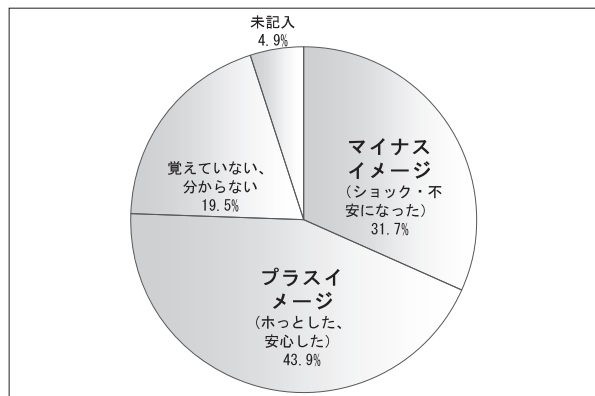
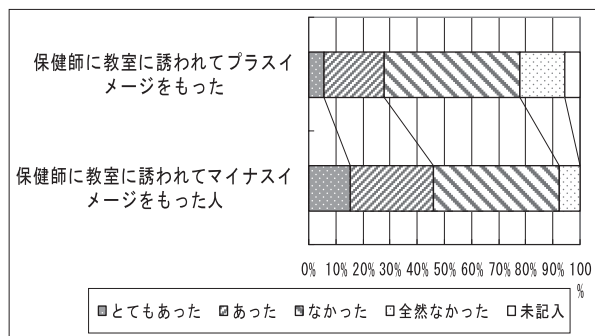


図1 幼児健診から親子教室へ参加までの支援



グラフ1 参加にあたり、保健師から教室の説明を聞いた時の感じ方の割合



グラフ2 教室中子育てについて何か言われるのではないかと不安があったかの回答別割合

D. 考察

グラフ2のとおり、『教室中子育てについて何か言われるのではないかと不安があったか』の問いにおいて、教室開始時に保健師の説明を受けてマイナスイメージをもっていた群が、プラスのイメージを持っていた群と比べて、不安を感じていた割合が高いことが分かる。このことから、最初に保健師の説明を受けた際の印象が悪くと、教室中においても不安な状態で参加している傾向があり、教室参加に対する、親のモチベーションが低いことがうかがえる。

『子どもの行動等で困ったこと』については、調査

前の予想どおり、「動きが多い」「言葉がゆっくり」が多い結果だった。一方で、「言葉がゆっくり」と感じ始めた時期については、1歳半～2歳程度と早い時期を予想していたが、調査結果によると「2歳～3歳」が最も多く、保健師が判断する時期よりも、やや遅い時期であった。

『スタッフのアドバイスで役に立ったり、嬉しかったこと』や『スタッフから言われた言葉で、つらい気持ちになったり、ストレスを感じたこと』の問いに対する回答から、スタッフのほめ言葉や成長に対する優しい声かけが、親をリラックスさせ、また反対に、子どもができなかった時のスタッフのまづい対応が、親のストレスとなっていることが分かった。親子教室では、開始時から、見のできる・できないに注目せず、「上手だね」等の声かけにより、親が見のよい面に目が向くよう、スタッフの対応を統一してきた。上記の結果からはその対応の重要性が明らかになった。

親子教室終了後の支援としては、児の成長面のフォローだけでなく、親子が安心して相談を続けられるようにするために、成長に合わせて、福祉や教育といった行政内の担当課の連携を深め、柔軟に対応できるフォロー体制を整備するとともに、親にもわかりやすい体制にすることが重要であると感じた。

E. まとめ

アンケートから、親も子どもの行動等で何らかの困り感を持っていたことが分かったが、その感じ方は保健師のとらえよりも遅い時期であり、早期に支援をしていくためには、親に子どもの発達を分かりやすく、かつ納得できるように伝えることが重要だと分かった。

また、教室に誘われた時の印象が教室中の不安要素にも影響している傾向がわかり、初期の保健師の関わりとして、親自身を支援していく姿勢が求められる。そのためは、発達の判断や、教室につなげることにこだわりすぎず、電話や訪問、次回の健診や専門相談につなげるなど、継続した支援の中で、親との信頼関係を築いていくことが大切だと分かった。

多くのお母さんたちは教室に前向きに参加していたが、その分、教室の内容や課題の意味について、もっと積極的に伝えていく必要がある。親が納得して教室に来ることで、教室の内容を家庭で活かすことができ、育児スキルが向上され、子どもの成長を促すことにつながっていくといえる。

今後も療育と育児支援を親子教室の両輪として、よりよい教室づくりに取り組んでいきたい。